



八代集抄

拾遺書及秋名

十五

特別  
イ 4  
3163  
104(5)



貴  
14  
3163  
104(15)

拾遺和歌集 二十卷

奇貞八雲云子三百六十一首袋家子因之

八雲抄云長徳比公任撰之歟一説云山法皇撰

撰之。後拾遺集序通後云元山法皇八雲云乃

少乃乃集うらうらうらうらうらとわひあひく

拾遺集と名づけたりと。是被世よりりきこ

人乃流や但新古今序の起た山院法皇撰た抄とゆ

い云古今は撰の多誤多。百葉の多

くおわくいおわくい事のやまあ

ざる林九。一東院の御制をいと



別り拾遺抄と云ふ物十卷あり。成吉思云拾遺抄  
奇負五百八十六首。花山院勅撰。一説云集は花山  
院抄に云々。八年見。集乃奇乃祥の  
名明子明抄云拾遺乃比より。祥事乃あるの  
近くあり。ことわりあり。あつて事なり。さ  
しをあるをより。とす。

言有百人一首抄云拾遺。又古今とあり。花山  
あひわたり。集あり。  
花山法皇の御諱師貞。冷泉院第一皇子。法母  
謙徳公乃法む。とめ皇太后宮懷子。永観二年十月

り。法皇のほうせり。法皇位二年より。寛和二年  
六月廿二日。おろし。とせり。花山より。法皇  
をあらせり。法皇十九法。諱入寛弘六年二月八日  
かかれり。とせり。早。集は物法大鏡。元亨釋書。あ  
大和物語。とせり。帝乃法皇のより。法皇集九多。  
公<sup>キミ</sup>仁<sup>ニ</sup>前<sup>マエ</sup>。按察<sup>アセシ</sup>大納言。正二位。法皇より。右衛門督。と  
関白。太政大臣。頼忠。廉義。乃一男。母八代明親。のむす。あ  
世り。四條大納言。とあり。和漢朗詠集。おほく。十の集。奇  
合。世六人。奇合。号奇合。金玉集。涼之秘抄。新撰髓昭。和  
奇九品。小山抄。乃作者。法皇。和漢の文人。とあり。



尺多し。靴承何人が昇るを録しり。と云はる。い  
たれ。靴承を昇給を清く。錦の袋よ。入つては。靴承に  
無秘およ。大判。言を。道坂乃。関の。ま。り。と。め。り。と。し。  
立出。書。つ。の。約。と。し。く。貫。之。が。道。坂。乃。せ。り。れ。  
清。み。く。り。靴。承。と。し。く。い。や。ひ。く。ら。ん。と。か。の。約。の。し。  
と。り。ま。ま。わ。り。と。し。か。ら。く。再。と。吟。と。れ。ば。又。書。之。を。  
ま。わ。ぬ。と。し。い。書。を。と。り。ん。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。  
未。常。と。し。く。い。ま。し。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
も。え。の。昇。合。と。い。つ。乃。評。定。を。と。り。ん。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
つ。乃。車。の。道。坂。乃。の。り。と。し。く。長。谷。の。ま。り。と。し。く。は。が。と。し。り。

き。つ。と。い。つ。乃。の。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
古今は撰拾遺を二代集とく。和歌乃。規模。と。す。  
袋承子云。時。も。遠。高。云。古今は撰拾遺を二代集と  
号。と。い。つ。乃。の。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
拾遺出。と。し。く。及。万。葉。を。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
定家。の。辭。并。大。概。云。詞。の。古。可。用。詞。不。可。出。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
二系大同乃。愚。問。賢。答。云。凡。又。昇。り。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
乱世乃。と。い。つ。乃。の。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
吟。賞。と。い。つ。乃。の。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。  
靴。と。い。つ。乃。の。り。と。し。く。と。い。つ。乃。も。し。り。と。し。り。

拾遺乃名目し所況 中右の事乃其後乃其の古今より  
 あつめしむは撰りて之れくは集はわづらふのこれ  
 おをひらふの心もよ。拾遺乃字を出のなとす  
 事どもろしし季年。拾遺記。楊維禎が史義拾遺  
 唐史拾遺 仙傳拾遺 などもあり。これよりし是部唐史の古  
 語拾遺 字拾遺 などもあればくはなり  
 け集よりなり万葉の并記等後集とあるものあり或は  
 家集よりなりては或は然し出されし人のものなるもの古  
 今六世等乃古集の并乃今く記是れと案ハ亦之 後撰亦也

拾遺和歌集巻第一  
 ようやう古ととがうー 志よいのとふん  
 乃といたううー 或いはいりうと  
 平とよん 少年乃字すー 頁文也好風のみん  
 平仲とついで 人々今乃後々々 徳集りる善  
 母合 人乃母を古たう 善いし 判者より後有るけい  
 一し 寛平天徳の比さる 乃見感さる 古今さる  
 暮を 懐かたさる 乃あるおるれい 只ものよ乃氣さ  
 まりて いふ乃ありさる 乃るるを 國さる  
 けいさる 一しとさる 乃いさる 乃とらふ眼を  
 けいさる 乃るるに 乃いさる 乃いさる  
 乃乃とらふ 乃ある乃上京のさる 乃の十種を  
 乃いさる 乃いさる 乃いさる 乃いさる

於一 又



定終 乃乃神六集  
 承平四年 朱雀院の  
 年号の帝 十二  
 の時 乃乃乃乃乃  
 官ハ延喜乃乃乃  
 昭宣乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃

拾遺和歌集巻第一

春

平乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

山を赤人万葉月鑑  
山邊宿祢赤人無  
皇之後也或抄赤人  
聖武天皇代上總  
国山邊郡出馬人  
也。官位未詳

中のまゝり 昔の  
乃字は一春日  
山六南宗代東の  
はまの原の原る也

冷泉院 今六十二代  
清康 平村上香  
第二皇子。天曆七年

五月廿二日東宮立  
乃乃山まのの心  
也時常の宗を立也

原をよみゆり  
山を赤人

まのまゝり 年八のわりのまのまゝり  
かすの乃やまのり せりあひなり

冷泉院東宮よりなりける時  
尋よりまわれとおろせられ

源重之 貞元親王  
原兼信男

よの山まれまゝり雪のりまゝり  
けさのまののりりりりり

延喜時月次清原

延喜の月次月次  
延喜六十六代醍醐天皇  
乃年号の月次乃  
屏風と八十二月の  
事とともなる也

あゝあれ年々  
まゝりあひりり  
はる雪を黄し

天曆六十二代村上春  
の年号

しかりふとまね  
乳乳月令三春乃  
谷乃まをこけゆ  
ありぬをよめり  
はやまの初花

素性法師 良岑  
男也

あゝあれ年々  
まゝりあひりりりりり

天曆時月次

源順 貞元親王  
原兼信男

まゝりあひりりりりり  
まゝりあひりりりりり

乳乳月令三春乃  
谷乃まをこけゆ  
ありぬをよめり  
はやまの初花



雪のふりてゆくしよ  
 お原の木の多き  
 立まらぬおれ縁  
 もあややま  
 へお原の雪も  
 おいそぎあそび  
 春もあつた  
 ままも梅の影  
 咲ぬはあそび  
 く降雪の梅も  
 れいそくちも  
 我書大梅よ  
 一石の梅も  
 雪のふりて

平祐舉 スカタカ 保衛男  
 雪のふりてゆくしよ  
 お原の木の多き  
 立まらぬおれ縁  
 もあややま  
 へお原の雪も  
 おいそぎあそび  
 春もあつた  
 ままも梅の影  
 咲ぬはあそび  
 く降雪の梅も  
 れいそくちも  
 我書大梅よ  
 一石の梅も  
 雪のふりて

雪のふりてゆくしよ  
 お原の木の多き  
 立まらぬおれ縁  
 もあややま  
 へお原の雪も  
 おいそぎあそび  
 春もあつた  
 ままも梅の影  
 咲ぬはあそび  
 く降雪の梅も  
 れいそくちも  
 我書大梅よ  
 一石の梅も  
 雪のふりて

天曆十年二月廿九日内裏新合子  
 中納言 船橋 マサタカ 船橋三郎  
 雪のふりてゆくしよ  
 お原の木の多き  
 立まらぬおれ縁  
 もあややま  
 へお原の雪も  
 おいそぎあそび  
 春もあつた  
 ままも梅の影  
 咲ぬはあそび  
 く降雪の梅も  
 れいそくちも  
 我書大梅よ  
 一石の梅も  
 雪のふりて

梅の花うねも  
 春の三つ入久々の  
 天乃花海(あまのうね)も  
 万葉(マンヤク)天(アマ)と云ふ  
 雲(クモ)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 中(なかに)花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 つまじを梅(うめ)のうねに  
 雪(ユキ)のうねに雪(ユキ)の  
 直(ただ)雪(ユキ)のうねに  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 上(うへ)に親(おや)のうねに  
 梅(うめ)のうねに雪(ユキ)の  
 雪(ユキ)のうねに梅(うめ)の

乳(う乳)のうね  
 梅(うめ)のうね  
 あまのうねに雪(ユキ)の  
 延(のび)長(なが)時(とき)宣(のたま)旨(旨)のうね  
 哥(うた)の中(なかに)は  
 貫(つら)く 紀(き)望(ぼう)行(ぎやう)男(おとこ)のうね  
 梅(うめ)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 同(どう)時(とき)長(なが)屏(びん)風(かぜ)のうね  
 花(はな)のうね  
 雪(ユキ)のうねに梅(うめ)の

梅(うめ)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 梅(うめ)のうねに雪(ユキ)の  
 わ(わ)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の

花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 冷(ひや)泉(いづみ)院(いん)乃(の)長(なが)屏(びん)風(かぜ)のうね  
 梅(うめ)のうねに雪(ユキ)の  
 平(ひら)兼(かね)盛(もり) 昔(むかし)大(おほ)捕(と)篤(あつ)行(ぎやう)男(おとこ)  
 從(したが)五位(ごい)駿(うま)河(か)守(まも)り  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の  
 花(はな)のうねに雪(ユキ)の



僻事抄云わささ  
昔此中よりいぬを  
あつてこころを  
春のこれさきさ  
の書はよ花三折  
乃わつとつとつ  
松のうまう  
雪れゆきとわさ  
うさうさ  
ぬのいすのな  
小ねわれいさつと  
る人のもあつと  
こころにわつと  
とのさしねるもあ

醍醐帝  
乃ちまよさうい  
なまあつと  
いさ月物子乃日は  
ね乃ううあつと  
とつわれ目とつと  
雪さうさ  
ぬのいすのな  
ふせれいさつと  
入る式了つの子  
大中后徳宣  
子ね徳宣

ゆわれいさ  
入る式了つ 敦實  
宮あま子天曆二年  
三月出家は名覚真  
りせさううまわ  
松あつとあま  
あれも式了つ宮あ  
あま子つたわわ  
うれいさつとつと  
よ百代やうん  
梅のこころ  
花のあつとつと  
こころにわつと  
はなつとつと  
雪のあつとつと

りせさううまわ  
きふいさつとつと  
延喜帝時は屏風  
梅たつとつと  
梅乃さつとつと  
うこにうつとつと  
雪さうさ  
はなつとつと  
こころのつとつと  
梅の花つとつと





若家の片擧  
 あまのつかりの良鹿  
 浅沼の野でまき葉の  
 ころもまき葉の野の鹿  
 中赤紅をれり香れ  
 わめけりさあ  
 上れ心きせぬ雪と  
 不情とりやん心通  
 慶景殿女侍作者部類  
 代明親女  
 中将文衣作者部類  
 糸濱伊衡女  
 又てもほりぬ花をへ  
 ぞとせぬいめるこ

こがねくまら花さくさく  
 歌きくもよみひくも  
 よのこませぬ雪と又しけく  
 ねつさけりさくさくありあり  
 天曆時時慶景殿女侍と中将文衣と  
 再合志信々宗清原元輔  
 又てもほりぬ花をへ  
 平らさあんの家れ再合志  
 ね

八あを我り  
 又てもほりぬ花をへ  
 あまのつかりの良鹿  
 浅沼の野でまき葉の  
 ころもまき葉の野の鹿  
 中赤紅をれり香れ  
 わめけりさあ  
 上れ心きせぬ雪と  
 不情とりやん心通  
 慶景殿女侍作者部類  
 代明親女  
 中将文衣作者部類  
 糸濱伊衡女  
 又てもほりぬ花をへ  
 ぞとせぬいめるこ

八あを我り  
 又てもほりぬ花をへ  
 あまのつかりの良鹿  
 浅沼の野でまき葉の  
 ころもまき葉の野の鹿  
 中赤紅をれり香れ  
 わめけりさあ  
 上れ心きせぬ雪と  
 不情とりやん心通  
 慶景殿女侍作者部類  
 代明親女  
 中将文衣作者部類  
 糸濱伊衡女  
 又てもほりぬ花をへ  
 ぞとせぬいめるこ

天曆時時慶景殿女侍と中将文衣と  
 再合志信々宗清原元輔  
 又てもほりぬ花をへ  
 平らさあんの家れ再合志  
 ね

春のれい山甲のむ打ひ  
 解つてありあのまへ  
 打とて人の志はゆる  
 さま山田のまゝのま  
 子とてふくまゝのま  
 ま乃田を人なまを  
 田作と種きくまゝ  
 人な打ゆるいぬ  
 花よ心をなして作  
 こをほしてそはけり  
 い舞六帖三貫足と  
 あつたれと様のみ  
 花に化るとりるあ  
 られといぬのわれ  
 ともあはせめてい

春のれいやま田乃むらちとけて  
 人乃らるるすうすうあり  
 承平四年中宮乃お派突しむいなる時  
 の屏風よ 秋宮内侍品首入まきゆ  
 ま乃田を人なりすをせ我へて  
 花よりこゝろをけくこゝろなる  
時平公且實國經子  
 宰相中将敦忠親信乃家の屏  
 風かざり  
家集古里のたを  
 あつたれと様のみさうさの里れ  
 じうあり乃物よりあはれ

梅のかりこゝるま  
 の氣ふかうし  
 とくはまのまを  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり  
 ちりちりさうあり

安院乃屏風よ山くらゆ人あり  
 こころ  
伊勢 大あき絶た女今  
 ちりちりさうありあやう里の  
 花んくさうあまん  
 いさ  
 ちりちりさうありあやう里の  
 花んくさうあまん  
 いさ  
 ちりちりさうありあやう里の  
 花んくさうあまん  
 いさ  
 ちりちりさうありあやう里の  
 花んくさうあまん  
 いさ



これいねいしよもひ  
 のほよわねん  
 きふもくし  
 乃佐言たに里あつた  
 人わらへし人あつた  
 思ふも人さつた  
 花のちやう  
 花よと種と  
 かつきく貴賤歌殊  
 皆くくえ  
 ころころは我が  
 惜れこののりほ  
 身の様もよ深く如や  
 せんとく  
 小なり様もよ  
 推中納言義懐 謙徳

安融院浄時と尺沙屏風よ

平兼盛

花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや

花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや

花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや

推中納言義懐家乃様の花乃  
 舟渡侍  
 舟渡侍  
 舟渡侍  
 舟渡侍

花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや

花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや  
 花乃もをう  
 わりや

天曆時尺沙屏風  
 義懐家  
 舟渡侍

ゆくゆくはのむに  
感もあつてまじり  
程くまゝに  
はげやんまぢり  
花盛を昔やん  
ちりあひゆり  
そこ花あや  
あゝあゝ  
ちりゆゑを  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ

ゆくゆくはのむに  
感もあつてまじり  
程くまゝに  
はげやんまぢり  
花盛を昔やん  
ちりあひゆり  
そこ花あや  
あゝあゝ  
ちりゆゑを  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ

あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ

あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ  
あゝあゝ



はばいさうりやうじん  
とていばらぬやうに  
かよふたはたぬむか  
山吹の後にまらぬ  
よわよわわらぬ  
おのゝついでに  
山吹の口をさす  
かみかみ言語同敷  
ゆるめしあわやうに  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ

かみかみ言語同敷  
ゆるめしあわやうに  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ

山吹乃うらうら  
又てはしり  
ふたれ  
わらやしのや  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ

山吹乃うらうら  
又てはしり  
ふたれ  
わらやしのや  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ  
いふことわらぬ

延喜寺時春官乃の屏風  
家集三十一  
はしり



まをばらんとて  
あはれめつらふ  
まをばらんとて  
まをばらんとて  
花のよきあり  
卯月一日の夜  
花のよきあり  
おこるまはし  
花のよきあり  
春の花のよきあり  
一風をまの  
花のよきあり  
あつたふらふ  
ていふまはし  
まをばらんとて  
花のよきあり

なれ  
源重之  
花のよきあり  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり

とちのうにまはし  
かたのうにまはし  
まのよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり

因融院浄時住持  
家集三首  
平兼盛  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり  
花のよきあり  
あつたふらふ  
まのよきあり







守備軍女軍家公  
 西方天下三人五人  
 子や一人おぼしきや  
 おのちのちや藤原  
 やうおのちのちや藤原  
 横谷日記三山三條  
 女部とて一統の多  
 昔のこゝ 延喜才四  
 昔より旧歌とてや  
 ほ雅よりあつ  
 ころと人にかゝる  
 都とていふわかれ  
 殿と人にかゝる  
 都とていふわかれ  
 都とていふわかれ

かしこくあつておぼしきやあつ  
 天曆時身合小 坂上ノ手ナキ城カノ是別  
 警衛カノあつてあつてあつてあつて  
 子や一人おぼしきやあつ  
 平兼國  
 寛和二年 内裏身合  
 右大将道綱母  
 子や一人おぼしきやあつてあつてあつてあつて

守備軍女軍家公  
 西方天下三人五人  
 子や一人おぼしきや  
 おのちのちや藤原  
 やうおのちのちや藤原  
 横谷日記三山三條  
 女部とて一統の多  
 昔のこゝ 延喜才四  
 昔より旧歌とてや  
 ほ雅よりあつ  
 ころと人にかゝる  
 都とていふわかれ  
 殿と人にかゝる  
 都とていふわかれ  
 都とていふわかれ

かしこくあつておぼしきやあつ  
 天曆時身合  
 警衛あつてあつてあつてあつて  
 子や一人おぼしきやあつ  
 坂上是別  
 昔のこゝにれ家の身合  
 天曆時身合  
 子や一人おぼしきやあつてあつてあつてあつて





彼言ひじよす巻心  
 船中<sup>カキ</sup>子奴さびり  
 て人も能んともさ  
 引くも...  
 童若...  
 百子なりじ...  
 小童...  
 童の...  
 月...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

コレ上モ、サカヤク  
 大伴恒上郎女<sup>藤原</sup>

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...

...  
 ...











きつるものいせま  
乃緒わすのまゆ  
しほららるわらわ  
セリものまゆけし  
わらわらほのまゆ  
一長ゆいの中らわ  
君の毎出せしを  
幸甲の納めし  
し門のうのわらわの  
そもセらなぬし法  
こそ年隔りし  
乃一年へこそ  
ほうりりりれい  
改めし法を

かたのしるし  
しりいなるわらわらう  
あまのせし  
清人  
湯原王 施基皇子男  
大細言正位贈從位  
いりなる  
るわらわ  
人唐

年一あるし  
わらわらわらわ  
あまの  
そまの  
昔氣の  
あまの  
い  
らん  
年  
時  
内乃

延喜寺時月次清屏風

はしほむ

七夕のぬきさしりて  
貫之集の延喜寺時月  
次屏風七月七日とて  
飾やうらやんと有り  
我れも...をぬき  
ゆせ七夕のありぬき  
ぬの洞より...を  
也...  
け...  
も...  
ひ...  
年...  
中...  
百...  
り...

七夕のぬきさしりてはしほむ  
い...  
右...  
ひ...  
り...  
右...  
あ...

乃...  
い...  
と...  
り...  
も...  
と...  
あ...  
あ...  
あ...

あ...  
七...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...  
あ...

七多<sup>い</sup>了<sup>う</sup> <sup>唯得<sup>ただ</sup>色<sup>しき</sup></sup> <sup>不<sup>ふ</sup>得<sup>とく</sup>兼<sup>けん</sup>求<sup>ぐ</sup>之<sup>し</sup>凡<sup>ぼん</sup>去<sup>こ</sup>龍<sup>りゆう</sup></sup>  
 可<sup>か</sup>力<sup>りき</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>

之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>

平實大經信しん

之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>

之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>  
 之<sup>の</sup> <sup>我<sup>われ</sup></sup>

般若心經

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ  
秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ  
秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の夜更けの静けさ  
を懐かしむる心  
もよおしぬ

秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに  
 秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに  
 秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに

秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに  
 秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに

秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに  
 秋の月夜に  
 月影を照らす  
 静寂の夜に  
 思ふに

秋の月影のうらやま  
山映いしのりよとん  
あまのよ河よとん  
いぢやう明し

か子よの秋よとん  
よし緒終三對  
てさのや  
秋の月影あはれ

あの子のよあはれん  
いよ被装の月影  
入徳をうく梅よと  
あまよあはれん  
あまよあはれん  
あまよあはれん

シギキコヲ頼忠多し唐帖云也  
藤原公乃家北の子とて秋の月  
あまのよ河よとん

源景明 大亮大納言兼左男  
長門守 大納言

秋の月影あはれん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん

あの子のよあはれん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん

へたれあの人れとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん

あの子のよあはれん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん

家集八月十八日  
あまのよ河よとん

あの子のよあはれん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん  
あまのよ河よとん

我者... 人... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾...  
藤原公家... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親...  
 伊勢

我者... 人... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾...  
藤原公家... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親...  
 伊勢

我者... 人... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾... 吾...  
藤原公家... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親... 藤原為親...  
 伊勢

うつろいゝ〜  
うつろいゝ〜  
かれぬ斗はれぬすけ  
わすの菊の 奥儀お  
云仙の菊の露は枝  
まて別と成りてま  
あつろいゝ〜  
九月九日の昔長  
房りおぬ今のし  
にのあかりし菊の  
なをいゝ〜  
く菊をうつすは後  
ふりし重陽と  
子ミナガ菊の功徳  
もくし〜我を  
とに後まをいゝ〜  
ふりし〜

ふりし〜  
たれぬをりし〜  
三條乃羅多公女末崔院后まをいゝ〜  
九月九日の昔長  
わりやらのま〜  
いゝ〜  
あつろいゝ〜  
花をいゝ〜  
大將定國つゆのち梅家屏風  
〜  
ふりし〜

休儀の大わ〜  
おろ〜  
のまをいゝ〜  
月をいゝ〜  
かま〜  
いり〜  
さ〜  
ゆ〜  
萩乃下な  
つろいゝ〜  
神の南の  
た〜  
〜  
下の  
〜

山乃本れをいゝ〜  
延喜時屏風  
〜  
月をいゝ〜  
萩乃下な  
三百乃十首乃中  
〜  
神をいゝ〜  
下の  
〜  
〜





おきつてさうおれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん

おきつてさうおれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん

健守法師 俗姓忠孝

おきつてさうおれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん

おきつてさうおれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん  
おきつてのあつたれん

天曆の時時殿上のあつたれん

のゆきんをよみり

源延文 中務代明親

其の男 枇杷大納言と

号す

もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
月の心れくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

乃くち井りりりりりりりり

源延文の伝

もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
月の心れくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

源兼光 春宮ヲ進 作者

ちよふの道に御申り

ありと紫杉てはるのほ  
くつわくちをよみり  
産いぬりくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

二条右大臣 道兼を

は真院園白兼家二男  
藤原系圖云園白兼家  
号栗田又二条と

もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
月の心れくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

ちよふの道に御申り

ありと紫杉てはるのほ  
くつわくちをよみり  
産いぬりくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

二条右大臣 栗田乃山

子乃ちりりりりりりりり

もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
月の心れくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり  
もみちをよみり  
くつわくちをよみり

法橋親教 或本云後大僧は 延暦寺に

きよ人のこころを  
嵐の心を今も  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ

きよ人のこころを  
嵐の心を今も  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ

我が本家  
うのこころを  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ

我が本家  
うのこころを  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ  
しるはかりわかれ  
しきよ人のこころ  
に今もわかれ

い事袋かきま三考

秋のふりかへるのうらみ  
しるしとよき秋の  
あまのこころの  
さびしき秋の  
山の尾まよき秋  
乃のうらみと秋  
いふこのころの  
大井の力は秋  
あり秋のあまの  
ふりかへるの  
下らむと秋  
あまのこころの  
あまのこころの

い事袋かきま三考

秋のふりかへるのうらみ  
しるしとよき秋の  
あまのこころの  
さびしき秋の  
山の尾まよき秋  
乃のうらみと秋  
いふこのころの  
大井の力は秋  
あり秋のあまの  
ふりかへるの  
下らむと秋  
あまのこころの  
あまのこころの

松三四

い事袋かきま三考  
秋をゆきし  
く風情ありとわ  
とねいし

これ乃秋重く  
つらきと

平兼盛

これゆき秋の  
いふゆきと  
からのゆきと  
あまのこころの  
さびしき秋の  
山の尾まよき秋  
乃のうらみと秋  
いふこのころの  
大井の力は秋  
あり秋のあまの  
ふりかへるの  
下らむと秋  
あまのこころの  
あまのこころの

畠山

河ひののり

家集延和十二年

十月南侍四十人の屏

風乃奇山乃ぬき

くれしるふもみ

ハ四の海邊

かき早とて時

れし海照塔

清涼殿の今

禁秘抄よ清涼殿

水る侍子之流細代

墨鏡也

あらまよりけは

細代本よのり

拾遺和歌集巻第四

冬

延喜時内侍のうたの屏風

紀貫之

河ひののりぬき

と今らんい

寛和二年清涼殿乃今

細代けの

あらまよりけは

日をと

文選蜀都賦

斐成濯色

蜀江

代水魚

神乃月

高八

し書

神乃月

高八

し書

神乃月

高八

し書

時乃月

かき

おの

神乃月

時乃月

高八

し書

神乃月

高八

し書

神乃月

高八

し書

橋本人磨

うらたはなちうらた  
神南無のまゆ甲のほ  
よしと音云こころの  
さだかづけていひこ  
うらたはなちうらた  
けいへおのほのほ  
さくけけおのほのほ  
いひこころのほ  
うらたはなちうらた  
けいへおのほのほ  
さくけけおのほのほ  
いひこころのほ

うらたはなちうらた  
おのほのほのほのほ  
うらたはなちうらた  
おのほのほのほのほ  
うらたはなちうらた  
おのほのほのほのほ  
うらたはなちうらた  
おのほのほのほのほ

信田編照

あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ

あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ  
あられくおんあられハ

よふ人さし





さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ

紀友則  
池乃、あがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ

目田

はすあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ

紀友則  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ  
さしあがりかたのあ  
の深草のこゝろ  
あつちのこゝろ

せぬるこよみちの雪は  
鶴の志をゆるぎなく  
あれはし朗詠三聲と  
已断花亭鶴  
夕されはまの月夜  
芳中ふまのうらと  
なをきしむいさか  
こひやうとくこひや  
浦ちくちりくる雪は  
奥の末松の海をえ  
こしほのこひや  
又ゆぬ末松の海  
こひと尋よかち  
よみちけまの雪のけ  
こひのこひとほの雪

夕されはまの月夜  
なすしとせらちりあく  
今さら  
浦ちくちりくる雪は  
丁五乃ねやまこす  
康義の家障より  
ととよけ  
そらどれ地のあまの  
月のいちのうら  
れきとよみちと

於四々

こひよかち  
そのどれ地のあまの  
こひと尋よかち  
月のいちのうら  
その地りくる雪は  
芳中ふまのうらと  
なをきしむいさか  
こひやうとくこひや  
浦ちくちりくる雪は  
奥の末松の海をえ  
こしほのこひや  
又ゆぬ末松の海  
こひと尋よかち  
よみちけまの雪のけ  
こひのこひとほの雪

そのどれ地のあまの  
こひと尋よかち  
月のいちのうら  
その地りくる雪は  
芳中ふまのうらと  
なをきしむいさか  
こひやうとくこひや  
浦ちくちりくる雪は  
奥の末松の海をえ  
こしほのこひや  
又ゆぬ末松の海  
こひと尋よかち  
よみちけまの雪のけ  
こひのこひとほの雪

源京時



白い雪ももろく  
雪なれらば  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは

年が尽くころ  
おろしき雪の降り  
入道持政の家  
は具院兼家の子孫に在る時  
おねり  
は古部頼国  
おろしき雪の降り  
おねり  
おろしき雪の降り  
おねり

雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは

あつた雪の降り  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは  
雪の降り積るは  
雪をうつり  
雪の積るは

あつて雪のほろり  
を今とせよ  
梅枝のさうり  
は梅枝のさうり  
をわくわく  
佛名會の年  
三母の松の名

屏風  
梅枝のさうり  
屏風のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり

六根の穂をうま  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり

梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり  
梅枝のさうり  
佛名のさうり

とてきりいりていふ  
と海にいと別を  
可なりしとていふ  
人のいふやまらん  
世人の罪を犯さる  
らうと名をせし家  
年の言と終る耳  
よし罪のつと  
そんていふ  
かふれい我母は  
まこといふに  
幸とていふ  
まこといふに  
りは  
いふ

屏風のよりいふ  
か  
人のいふやまらん  
との今はいふ  
安院の屏風は十二月の  
か  
ま  
可首舞  
源  
か  
か

